



- 竹下景子国連WFP協会親善大使、フィリピン台風被災地を訪問
- 私たちのWFP支援 キャンソン株式会社
キャンソマーケティングジャパン株式会社
- 南スーダンと中央アフリカで「レベル3」の緊急支援
- 安藤会長、ミャンマーの国内避難民キャンプを視察
- 「RED CUP CAMPAIGN」レポート
- WFPエッセイコンテスト2014 作品募集



屋根の半分が無くなってしまったバスケットボールコートに設けられた栄養強化パウダーの配給所。



米の配給を手伝う竹下さん。



傾いた建物の下で暮らす人がいた。

写真 関口照生

竹下景子国連WFP協会親善大使、フィリピン台風被災地を訪問

昨年11月8日、フィリピン中部および東部の島々を猛烈な台風が襲い、フィリピンの7人に1人に当たるおよそ1,400万人が被災するなど、甚大な被害が発生しました。半年近くが過ぎた4月下旬、国連WFP協会親善大使の竹下景子さんが被災地を訪問しました。

毎日の食事に欠かせないお米の支援

竹下さんが最初に訪れたのは、サマル島東部のヘルナニにある米の配給所です。国連WFPによる米の配給は1月もしくは2月で終了している場所がほとんどですが、この地域は元々フィリピンの中でも貧しい地域で都市部からも離れており、4月に入ってからでも支援を必要としている被災者がいたため、国連WFPが米の配給を継続していました。

被災者は1人当たり5kgの米を月2回受給しており、視察の際の配給が最後の回ということでした。米を受け取りに来ていた2児の母、リサ・コンサルタドさんに竹下さんが話を聞くと、「ココナッツと米を育てて生計を立てていましたが、ココナッツは完全に駄目になってしまったので、収入がかなり減ってしまいました。今は国連WFPの支援に頼るしかありませんが、早く元の生活に戻れることを願っています。いただいたお米は節約しながら大事に使っています」と語りました。米の配給を手伝った竹下さんは、「被災者の方々から口々に『ありがとう』という言葉をいただき、国連WFPが配っているお米がどれだけ助けになっているのかが分かりました」と話しました。

竹下さんは次に、国連WFPの支援の一つである「キャッシュ・フォー・ワーク」に向けた女性グループのミーティングに参加しました。キャッシュ・フォー・ワークは、労働に参加した人に食糧購入用の現金を配給することで被災者の生活や地域の復興を支援するもので、この度の支援では1日当たり245ペソ(約550円)が支給されています。女性たちはこの支援で野菜の栽培を行っており、カボチャやインゲン、キュウリ等を育てているとのことでした。女性たちが自発的に集まり、復興に向けて活動していることを知った竹下さんは、「彼女たちが積極的に頑張っている姿が印象的でした」と語りました。

次ページへつづく ▶▶▶

国連 WFP では皆様からの継続した支援を必要としています！





海岸沿いにうちあげられた大型船の周りには貧しい人々が暮らす多くの住まいがあり、「ようこそヨランダ村へ」と書かれた板がかかっていた。「ヨランダ」は本台風のフィリピンでの呼び名。

重要な収入源であるココナッツの木もほとんどがなぎ倒されてしまった。収穫できる状態になるまでには6~7年かかるという。

写真 関口照生

栄養支援が支える母子の健康

翌日はレイテ島タナワンにある、母子栄養支援の現場を訪れました。ここでは、ふりかけのように食事にかけることでビタミンや鉄分等が摂取できる栄養強化パウダーの配給所を訪問。現地では、生後6カ月～5歳未満の乳幼児およそ300人とその母親たちが集まっており、国連WFPと連携して活動するNGO職員による栄養指導やパウダーの使い方の説明、さらに衛生指導などが行われていました。竹下さんは、サンプルとして準備されたパウダー入りの食事を子どもの口に運んだり、1カ月分15袋のパウダーを母親達に配る手伝いをしたりして、被災親子らと交流しました。

その次は南下し、トロサにある栄養支援の現場を訪れました。ここでは、栄養不良に陥っている6カ月～5歳未満の乳幼児約15人と母親が集まり、栄養・衛生指導や健診、プランピー・サップ(ピーナツペースト状の栄養強化食品)の配給を受けており、竹下さんはその配布を手伝うなどしました。2カ所の栄養支援を視察した竹下さんは、「栄養不良が問題となるであろう被災後、子ども達や妊娠中のお母さんに十分な栄養を摂ってもらうことは、将来この国を背負っていく子ども達の未来につながっていくことなので、とても重要な支援だと思いました」と語りました。



栄養強化パウダーがかけられた離乳食を与える竹下さん。



1カ月分の栄養強化パウダーを渡す竹下さん。



プランピー・サップを食べる女の子。

写真 関口照生

被災地を忘れずに

被災地では、比較的復興が進んでいた場所もありましたが、被害が大きかった海岸沿いや遠隔地では、未だテント暮らしの人々や、ビニールシートや板切れで作った住まいで生活する人たちが大勢いました。竹下さんは、「特に、貧しい人たちが一番被害を被る感じました。しかし、厳しい環境の中でも子ども達は元気で、人々はたくましく生きていました。私達も被災地のことを忘れずに、継続的な支援が必要だと思います」と感想を述べました。



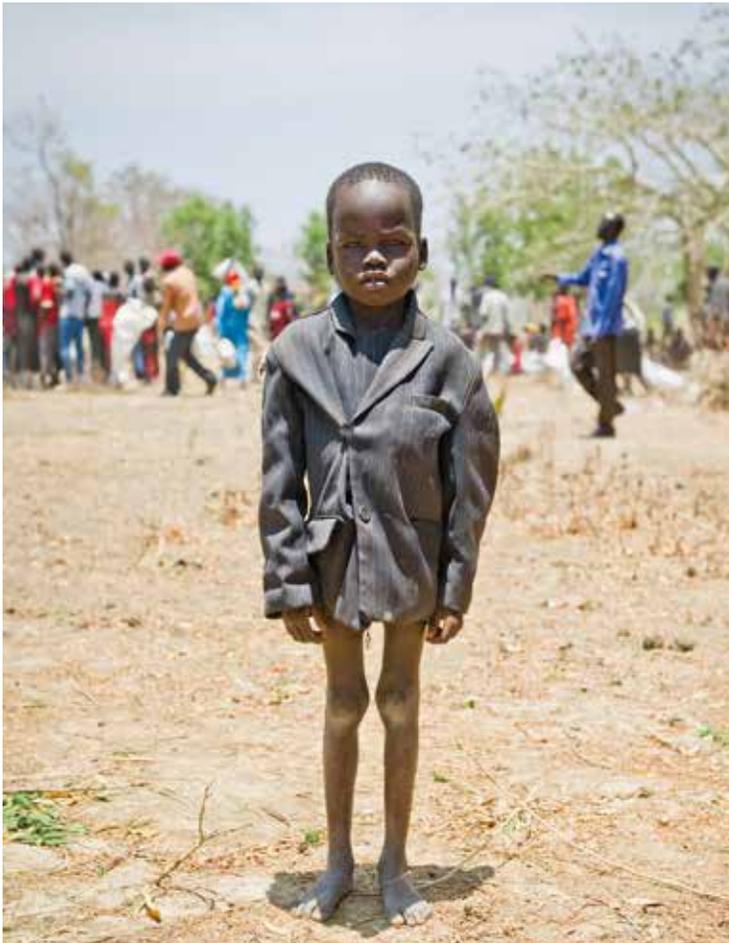
女性グループの皆さんと 写真 関口照生

～竹下景子国連WFP協会親善大使からのメッセージ～

この度のフィリピン巨大台風への支援第1位はアメリカ政府、3位は日本政府。そして第2位は日本を含む各国の個人や企業の皆様からの寄付によるものでした。こんなにも早急に多くの善意が届けられた例はない、と国連WFPフィリピン事務所の代表の方に言われ嬉しくなりました。普段日本で生活していると、物質面でもわりあい恵まれており、今日と同じような明日が来ると無意識に思うってしまうこともあると思います。しかし、私たちが支援を必要とするのも今後往々にしてあるはず。支援というのは、一方通行のものではなく、『お互い様』という気持ちを持って行うものだと思います。

飢餓は私達の努力で撲滅できます。引き続き、皆様のご協力をお願いいたします。

※国連WFP協会は台風直後に緊急支援募金を実施し、2014年3月24日までに合計9,000万円をフィリピン支援用として送金しました。



南スーダンのユニティ州にて。戦火を逃れてきた子どもの多くは栄養状態が悪く、国連WFPは栄養支援に取り組んでいます。

©WFP/Giulio d'Adamo



国連WFPの支援食糧を受け取った家庭の子どもたち。

©WFP/Giulio d'Adamo



食糧の空中投下の様子。陸路での物資輸送が難しい場所では、飛行機で食糧を届けています。

©WFP/Giulio d'Adamo

今、南スーダンと中央アフリカ共和国で紛争による非常に深刻な飢饉が発生しています。国連WFPは最も深刻な「レベル3」の緊急事態と認定し、全力を挙げて支援にあたっています。

2011年に独立した南スーダンでは、去年12月から政府と反政府勢力の武力衝突が続いています。暴力が蔓延する中、農業や牧畜業は中断を余儀なくされ、商業も滞り、400万人が人道支援を必要としています。およそ100万人の国内避難民が発生し、エチオピア、ケニア、ウガンダ、スーダンの周辺4カ国にも新たに難民35万人が逃れました。

飢饉の深刻度を示す国際的な指標では、飢饉は「最小限、切迫、危機、緊急事態、飢きん」の5段階に分類されますが、激しい戦闘が行われている南スーダンの北東部では半数以上の人々が「危機・緊急事態」（第3から第4段階）に相当する厳しい飢饉にさらされています。

物資の陸路での輸送は、戦闘や略奪などに巻き込まれるため難しく、3月からは食糧の空輸や空中からの投下を始めました。川を使っ

た食糧を届けました。子どもや妊婦などへの栄養支援も行っています。周辺国に逃れた南スーダン難民への支援活動も拡げています。

5月9日、停戦合意が結ばれましたが、状況は予断を許しません。支援が行き渡らなければ、さらに深刻な、壊滅的な飢饉が発生する可能性もあるとの調査結果が出ており、今後はさらに支援を拡大する予定です。しかし、同国での活動に必要な資金およそ6億ドルのうちまだ6割しか集まっていません。

イスラム教系勢力とキリスト教系勢力の武力衝突が激化している中央アフリカ共和国では、経済と農業が崩壊の危機に瀕しています。去年の国内総生産は前年度比で28%減。食糧生産量も前年度の38%減と落ち込みました。飢饉状況の調査では、調査が行われた地域の人口の45%が「危機・緊急事態」（第3から第4段階）の状態でした。

暴力を恐れて国内各所に避難する人々が55万人に達する中、国連WFPは4月、国内35カ所で20万人以上に食糧支援を行いました。栄養不良の子どもや妊婦などには栄養支援を行っており、首都バンギでは日本のNGO「アフリカ友の会」が運営する保健施設にも栄養強

化食品を配布しています。治安状況が比較的安定しているところでは、学校給食を提供しています。さらに、農家が飢えをしのぐために作付け用の種を食べてしまうことがないよう、姉妹機関のFAO(国際連合食糧農業機関)とともに食糧と種を農家に配布しています。

中央アフリカの危機は周辺国にも波及しています。同国からはすでに23万人がカメルーン、チャド、コンゴ民主共和国、コンゴ共和国に逃れました。森に隠れながら何週間もほぼ飲まず食わずで逃避行を続けるため、隣国にたどり着いた時には健康状態が非常に悪く、たとえばカメルーンでは中央アフリカから到着した人の4人に1人が深刻な栄養不良とのこと。さらに、元々困窮していたところに難民が押し寄せ、受け入れコミュニティの負担は限界に達しています。早急な支援拡大が求められますが、国連WFPは資金難に直面し、配布する食糧の量を減らすなどの策を迫られています。

支援を必要としている人たちの多くは女性と子どもです。彼らの命をつなぎ、生活を支えることで、10年後、20年後の未来が変わってきます。どうぞ皆様の温かいご協力をよろしくお願いいたします。

国連WFPでは「皆さんの力で、給食が届く、世界がより良くなっていく。」を願いとして、「RED CUP CAMPAIGN」を展開しています。様々な企業が商品にレッドカップのマークを入れ、その売り上げの一部を寄付する取り組みを展開しています。2014年5月から、新たに**全国農協食品株式会社**がキャンペーンに参加してくださいました(2015年4月末まで)。現在進行中、並びに過去の事例はレッドカップキャンペーンのサイト(www.redcup.jp)をご覧ください。



写真提供:全国農協食品

私たちのWFP支援 **キヤノン株式会社** **キヤノンマーケティングジャパン株式会社**

キヤノン株式会社は2006年から、キヤノンマーケティングジャパン株式会社は2008年から国連WFPを支援しています。今回はキヤノン株式会社 CSR推進部 天野真一様、キヤノンマーケティングジャパン株式会社 CSR企画推進部 早坂修一様、横井康隆様にお話を伺いました。

Q1. 国連WFPを支援している理由を教えてください。

キヤノン株式会社(以下C)—モノづくり企業として世界中に拠点がある弊社としては、グローバルな課題に取り組みたいという思いが以前からありました。その中で弊社代表取締役会長兼社長CEOの御手洗富士夫(2006年当時会長)が国連WFP協会の顧問を務めさせていただいているのもきっかけとなり、支援させていただくことになりました。

キヤノンマーケティングジャパン株式会社(以下CMJ)—日本国内でのマーケティングを担っている弊社は、それまで環境支援を中心に活動しており国際的な社会貢献活動になかなか参加できていなかったのですが、グループ会社のキヤノン株式会社が支援を始めたのを知り、当社としても支援させていただくことになりました。

Q2. どのような支援活動を行っているか、また工夫している点など教えてください。

C—まずは社員に知ってもらうことが大事です。そして支援活動に参加しやすいように、敷居を下げるような工夫をしています。「食」「健康」など関心を持ちやすいテーマと連動させ『ウォーキングイベント』や『ランチカード募金』を行いました。『ウォーキングイベント』は一定期間中の1日平均歩数が10,000歩を超えた場合、達成者1人につき100円(学校給食約3日分)を寄付するという取り組みです。「自分のやっていることが何となくいいことにつながる」こう思うことから始めることが大切だと思います。また、支援当初から『WFPウォーク・ザ・ワールド』にも参加しています。



今年の「WFPウォーク・ザ・ワールド」にはグループ全体で226名が参加しました。

CMJ—『WFPウォーク・ザ・ワールド』には私たちも参加しています。社外で社員が一つのことに取り組む機会はなかなかないので良いきっかけにもなっています。また、その他の取り組みとして、社員募金の実施や、「寄付つき自動販売機」の社内設置、子どもたちが親の職場見学をする「キッズデーイベント」で国連WFPのブースを出しました。自動販売機は社員が日常的に利用するものなので気軽に参加することができます。また、イベントのアンケートでは「世界の飢餓と貧困について子どもに教える良いきっかけになった」という声もあり、子どもたちが参加することで社員への啓発活動にもつながっています。



昨年の「キッズデーイベント」の様子。

Q3. 今後の取り組みについて教えてください。

C—気候変動や災害など、食糧不足はもっと深刻になる可能性があります。また、自分たちがいつそのような状況に置かれるかわかりません。「海の向こうの飢餓」ではなく「今そこにあるリスク」として、日頃からの啓発活動を続けていきたいと思っています。

CMJ—世界の食糧問題の解決に向け活動している国連WFPには今後も期待しています。問題の解決のためには、まず、知らないことには始まりません。社員とその家族が理解を深められるよう、今後も啓発活動を続けていきます。

インタビューを終えて

今回お話を伺いし、ご担当者様がいかに社員の皆様に知っていただき、参加しやすいように工夫しているかを改めて知ることができました。今後も両社とコミュニケーションを取りながら、共により良い活動を続けていこうと思います。(国連WFP協会 事業部 石川)

安藤会長、ミャンマーの国内避難民キャンプを視察

3月下旬、国連WFP協会会長の安藤宏基を団長とする視察団が、ミャンマーを訪れました。視察に同行した国連WFP協会事務局長の関口泰衛が報告します。



米の配給にあたり袋詰めの手伝いをする安藤会長と関口事務局長。



- 1 栄養強化食品を製造する国連WFP提携の工場。2 倉庫から一袋50kgの食糧袋を運ぶ人々。
- 3 シンテモーの避難民キャンプへ到達するため、小舟を降りて徒歩で陸へ向かう様子。
- 4 視察団との交流の場に参加したイスラム教徒住民の方々。5 キャンプに暮らすイスラム教徒住民の母子。
- 6 一家庭の調理場の様子。7 キャンプ敷地内を視察する会長。8 セットヨーチャーのキャンプの様子。

©JAWFP

— ミャンマー視察 —

ミャンマーは日本の1.8倍の国土に約5,800万人が住む、映画「ビルマの豎琴」で有名な日本人に親しみのある国ですが、総人口の7割強を占めるビルマ族以外に100を超える少数民族がいる多民族国家であることは、あまり知られていません。

そのため、ミャンマー国内では民族間又は宗教の違いによる衝突、紛争がしばしば起こっており、今回はそれらの紛争により国内避難民となった人たちが住むキャンプを訪れ、国連WFPの支援活動を視察して来ました。

— 栄養強化食品製造工場の見学 —

まず最初に、到着地であるミャンマー最大の都市ヤンゴンで栄養強化食品を製造する国連WFP提携の工場を見学しました。この栄養強化食品は米と大豆の粉にビタミン、ミネラルなどを混ぜたもので、ミャンマーの国内避難民や栄養を必要とする妊婦、授乳中の母親、5歳未満の子どもに配給されています。国連WFPが昨年度ミャンマーで調達した栄養強化食品は1,527トン(約1億7,000万円分)のぼります。衛生的且つ近代的な工場設備の中で、現地の従業員が整然と働く姿を見て、国連

WFPの活動は現地の雇用と経済にも貢献していることを実感しました。

— 国内避難民キャンプを視察 —

ヤンゴンでの工場見学の後、国内線飛行機で約900km離れたミャンマー西部に位置するラカイン州の首都、シットウェーに向かいました。シットウェー到着後はすぐに国連WFPの事務所に行き現地での活動報告を受けましたが、その敷地内にある巨大な食糧倉庫では、ちょうど食糧の荷揚げ荷下ろし作業が行われていました。

それを見学の後、事務所に隣接する船着き場より国連WFPの貨物ボートで約1時間かけて、国内避難民キャンプのあるシンテモーに向かいました。ラカイン州では歴史的に仏教徒と、隣国バングラデシュから1世紀前に移り住んだと言われるイスラム教徒との対立があり、一昨年には民族間の大規模な衝突が起こり、イスラム教徒側を中心に14万人が自宅を追われ、国内避難民となりました。

シンテモーのイスラム教徒避難民キャンプは、貨物ボートで川を下り一旦外洋(ベンガル湾)に出て、沖合で貨物ボートから小舟に乗り換

え、またその後、陸から100~200m離れた地点で小舟を降り、浅瀬の海を陸まで歩いて行かなければならない、という大変な場所がありました。そして上陸後も約30分歩き、目的地にようやく到着しました。キャンプ地内の住宅、施設等の見学後、その日は各戸への国連WFPの米の配給日だったので、米の袋詰めのお手伝いをし、どのように配られるのかを身をもって体験しました。その後、キャンプ地内の広場で避難民の人たちとの会合が準備されており、母子栄養支援を含む国連WFPの包括的な食糧支援並びに日本からのこれまでの支援に対するお礼の言葉を数々もらいました。

ただ、ここで暮らす避難民は社会から隔離された場所で、十分な教育を受けたり就労の機会を得ることができていないため、今後将来に向けて農業や漁業で自立ができるよう、国連WFPがすすめるフード・フォー・アセット(地域の自立支援のための食糧支援)や手に職をつける訓練等の支援を行う必要があると痛感しました。キャンプ地から海岸までの徒歩での帰路、大勢の子どもたちが我々視察団を取り巻き、一緒に歩きながら見せたその屈託のない素直な笑顔はずっと印象に残っています。

次ページへつづく ▶▶▶



キャンプに暮らす子ども達。



日本の支援で調達された栄養強化油が倉庫に保管されていました。

©JAWFP

翌日、今度は仏教徒の避難民キャンプを視察しました。セットヨーチャーという場所にあるこのキャンプは、シットウェーの街中に位置し、国連WFPの食糧支援を受けながら、早く前の生活に戻るよう自立を促す施策がとられていました。キャンプの代表者達との懇談会では、農業での自立を目指すこと、街に出て仕事ができるよう公共バス等のサービスを州政府に依頼し、就労の機会を得て、元の生活にできるだけ早く戻りたいと語っていました。子どもたちの教育は、他のNGO等の支援もあり充実しており、国連WFPの学校給食支援には大変助けられているとの感謝の言葉を代表者からもらいました。こちらの避難民キャンプは自立を促すことに力を置き、その支援に注力していると国

連WFPの現地職員は話していました。

一 視察を終えて

安藤会長は「これまでに視察してきた、カンボジア、エチオピア・ケニア、フィリピン、そして今年のミャンマーと、それぞれ困難の状況や内容に違いはありますが、国連WFPの地道な支援活動が、一貫してこれらの地域と人々の生活を支えており、日本からの支援が確実に現地に届き、役立てられていることを直接確認することができとても嬉しく思いました。キャンプで駆け回る子どもたちの元気な姿と笑顔に勇気づけられ、飢餓と貧困を世界からなくすために、日本の民間からの支援の輪が一層広がるよう今後も努力して行きたいと、強く思いました」と話しました。

WFPエッセイコンテスト2014 作品募集

国連WFPでは、7月1日より、「いただきます」と「ごちそうさま」をテーマにエッセイを募集します。8人に1人が飢餓に苦しんでいる世界で、国連WFPは、途上国の貧困に苦しむ子どもたちに学校給食を提供しています。世界でも日本でも食は私たちの生活の基本。食への感謝を表現する日本特有の言葉、「いただきます」と「ごちそうさま」を通して、誰もがもつ身近で自分なりの、食にまつわる経験や思いをつづってください。食べることの意味や可能性を考え、改めて日常を見つめ直すことで、食べ物がなく飢餓で苦しむ世界の人々や世界の食糧事情にも目を向けていただくきっかけを作ります。応募1作品につき、給食約1日分(30円)が、寄付協力企業より寄付され、給食支援に役立てられます。是非ご応募ください。



©FAO/IFAD/WFP/Petterik Wiggers

【実施概要】

※詳細は、専用ウェブサイトにて。 www.redcup.jp/essay/2014

テーマ	「いただきます」と「ごちそうさま」
募集期間	2014年7月1日～9月10日[締切日必着]
部門	1) 小学生部門(4、5、6年生) 2) 中学・高校生部門 3) 18歳以上部門
応募方法	郵送およびオンラインで受付。字数は400字～800字まで。
発表	10月16日に専用ウェブサイトで発表。
お問い合わせ先	WFPエッセイコンテスト事務局 Tel. 03-3980-9030 10:00～12:00 / 13:00～18:00(土日祝日を除く)

国連WFPでは皆様からの継続した支援を必要としています！



© Mayumi.R

～ WFP マンスリー募金にご協力ください～

世界には、1日に一度の食事すら満足にとることができず、空腹状態のまま学校に通う子どもが6,600万人います。また、6,700万人の子どもは学校に通うことすらできません。国連WFPは、毎年平均60カ国、2,000万人以上の子どもたちに栄養価の高い給食を届けています。1日30円の給食が、その日唯一の食事となる子どもがたくさんいます。子どもたちの未来を支える「学校給食プログラム」にご協力ください。

例えば、毎月 5,000円 のご寄付を1年間で

子ども12人に栄養たっぷりの給食を1年間届けることができます。



*「毎月の寄付」のほかに、任意の金額を随時ご寄付いただく「今回の寄付」もごぞいます。

寄付方法

- ✓ クレジットカードで
- ✓ 銀行またはゆうちょ銀行から
- ✓ 楽天銀行から

▼お申込み、お問い合わせはこちら▼

☎ お電話で	0120-496-819 受付時間 9:00～18:00(年末年始を除く毎日)
ウェブサイトから	www.wfp.org/jp

*国連WFPへのご寄付は、寄付金控除など税制上の優遇措置を受けられます。

国連WFP

〒220-0012 横浜市西区みなとみらい1-1-1 パシフィック横浜6階 www.wfp.org/jp
0120-496-819 受付時間 9:00～18:00(年末年始を除く毎日)

Facebook、Twitter、メールニュース
でも最新情報をご紹介します。是非ご利用ください。